



MEISTER ワイヤロープ加工

ほりかわひでき 堀川英樹さん (株)ホリカワ代表

昭和15年中国・長春生まれ。昭和35年、熊本県天草郡倉岳町から八幡市(現北九州市)へ。1級ロープ加工技能士の資格をもつ。全国鋼索商業会副会長、全国ロープ加工連合会常任相談役などボランティア活動も多い。平成13年、北九州マイスターに認定。

完成したワイヤロープ。先端を曲げて、巧みに編み込んでいく「巻き刺し」。堀川さんは、最も安全とされるこの技法を広めました。



技術は、続けていると体が自然に覚えていく。ワイヤロープの加工も使命をもって続けること。

ワイヤロープといっても、私たちの生活とどのように関わりがあるのか、すぐにピンとくる人は少ないと思います。ところが、車のブレーキ、エレベーター、飛行機のフラップ、ビルや道路など、私たちの命と密接につながる所で使われているのです。堀川英樹さんは、そのワイヤロープの加工で、北九州マイスターに認定されています。堀川さんが扱うワイヤロープは主に、ビルや橋、高速道路などの工事現場で使用されています。クレーンで鋼材を吊り上げる時に使用するワイヤロープの先端の輪っかをつくったり、太さを補強したり、熟練者ならではの技能で仕上げていきます。今まで手がけたワイヤロープは幅広く400トンの原子炉を吊り上げる直径100ミリから医療用の直径0.8ミリまで。

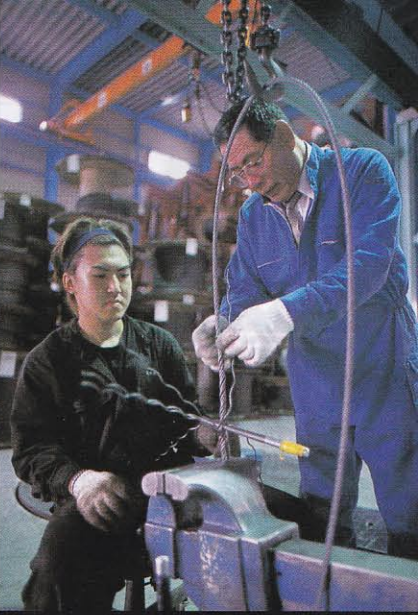
「博多リブレインビルくらい規模の工事になると、鋼材の重量や大きさ、材質などによって毎日違うワイヤロープを使う。だから注文があるとその日に加工して翌朝届けないと工事がストップしてしまふ。どんなに急いでも端末がほじけたり、切れないようにつくるのが私たちの使命。自分の技に多くの人の命が、託されているから、一刺し一刺しが真剣勝負です」堀川さんは20歳の時、熊本県天草から鉄の景気に沸く北九州へ。八幡製鉄の関連会社でとび職の仕事をしている時、工事現場でワイヤロープ

がゆるみ仲間の一人が死亡する事故を目撃しました。二度と事故を見たくない、と思った堀川さんはとび職の親方の「オマエは職人に向いている」の言葉を信じてワイヤロープ加工の仕事に本格的にはじめ、関東や関西など各地で修業をつみましました。堀川さんに転機が訪れたのは、31歳の時です。結婚と同時に、5人の社員を抱えて今の会社をスタートさせたのです。「自分がつくった玉かけワイヤロープが社会の安全のために役立っていると考えると、嬉しくてね。毎日朝6時から夜11時まで働いても平気でした」忙しい中でも、堀川さんは初心を忘れませんでした。昭和52年頃から業界でワイヤロープの規格づくりの運動がはじまると、九州では先頭になつて活動をし、日本中を飛び回り仲間たちと規格づくりに励みました。規格ができると、それまで1年間で約400件もあった事故が5年後には約50件に減っていました。技能指導や講演会は今も続き、業界のレベルアップや安全にも貢献しています。「ウチの若い弟子(従業員)たちにもいつも言っているのは、技能を身につけるのに5年、一人前の職人になるには10年かかる。だからとにかく辛抱だ。続けているうちに、頭で考えなくても体が自然に覚えていく。そうすれば力が自然に覚えていく。仕事に面白が出てくる。そして仕事は

使命感を持つてすること。ワイヤロープは産業の命綱だ。お金のためにするな。今日1日どうやって今の仕事をやり遂げるかだけを考えろ」と現在、戸畑にある会社では、15名の男子従業員がワイヤロープと力強い格闘を続けています。「技能は後輩に伝えていくもの。私の元で修業して、外で頑張っている者も多くいます。でもそろそろ会社の後継者を育てたい。職人の心のDNAを引き継いでくれる人と思つていきます」さて、そんな堀川さんには、仕事上での大切なパートナーがいます。奥様のカズ子さんです。「私が留守をする時は、いつも彼女が会社を守ってくれました。独学で技能を学び、私と同等に仕事をこなしてきたのだから、自分の女房とはいえ、すごいと思います」



会社のすぐそばには、若戸大橋が見える散歩道が。「こんないい場所があったなんて知りませんでした。仕事ばかりしてちゃダメですね」とカズ子さん。



↑若い従業員に自ら指導にあたることもしばしば。堀川さんは汗もかかずにワイヤロープをほどいたり編み上げたりしていく。←ロープを組む、力強くリズムカク動きに圧倒!「いちいち見なくても、体が覚えてるんです」。

↓この日は、製鉄所の溶鉱炉の改修に使うワイヤネットを製作中。「最も危険を伴う作業に、わが社の製品を選んでいただけるのだからいつも感謝しています」。安全性に妥協を許さず、信頼を裏切らない努力が続きます。

